

歴史 探訪



暮らしとよろこびを乗せて 人々の想いを 運んだ沼尻軽便鉄道



そこには、すべての人が「一つの鉄道に寄り添って生きていた時代」がありました。JR磐城西線の川桁駅と、鉱山で栄えた沼尻を結ぶ沼尻軽便鉄道は、かつて地域の産業を支え、観光客の足ともなり、そして何よりも沿線の暮らしを支え続けました。人々に愛され、惜しまれながら廃止となったこの鉄道が、今もなお多くの人を引きつけてやまないのは、一体なぜなのでしょう。ここでは、人々のいろいろな想いを乗せて走った軽便鉄道の軌跡をたどってみました。

沼尻軽便鉄道
安達太良山西麓の沼尻鉱山の硫黄運搬などを目的として、大正2年(1913)に全線開通。開業時は「馬力」であったが、多くの物資輸送に対応するため、翌年には蒸気機関車での運搬になった。鉄道は、鉱山の好景気や湯治客・スキー客などに支えられ、沿線住民の足としても活躍。時代の流れとともに「ガソリンカー」さらに「ディーゼル機関車」に切り替えて走り続けたが、鉱山の盛衰と運命を共にし、昭和43年(1968)10月、惜しまれつつもその歴史に幕を引いた。

かの有名な歌謡曲「高原列車は行く」のモデルにもなった沼尻軽便鉄道。歌のイメージにふさわしく、線路跡沿いには今も磐梯山をはじめとするとるさわやかな風景が広がっていますが、



春の日の沼尻軽便鉄道(昭和43年4月)
うららかな一日、桜並木を走る客車には、のんびりと風景を楽しむ人々の姿があります



磐梯山麓を走るディーゼル機関車。客車とともに硫黄を積んだ貨車をけん引しているのが、鉄道の歴史を物語っています



上り列車の後部デッキで最終日の鉄道を名残り惜しむ親子連れ(昭和43年10月)



「昔、この辺はね……」線路跡で思い出を語る田中さん、渡部さん、安部さん(左より)



機関車のステップに昇った時の渡部さんの笑顔は、だれよりも輝いて見えました



ひざを交えての世間話に花が咲いて……ローカル線ならではの風景です

その歴史は、沼尻鉱山から採れた「硫黄」の輸送手段として始まりました。当時、日本は世界的な硫黄輸出で、その第一次勃興期は明治末期から大正6年(1908)~1917(ころ)と行われていますから、まさにそれは、軽便鉄道の開業から発展に至る時期と重なります。昭和の最盛期(昭和8~14年ころ)、硫黄は化学繊維・バルブ・肥料に加えて、ゴム製品・セロファン・染料化学薬品などをつくるための必需品として用途が拡大。ピークの昭和11年には17184トンの硫黄を沼尻鉱山では生産しました。

しかし、このような「産業を支える」役割ばかりでなく、いろいろな「顔」を持っていたことも、軽便鉄道の大きな魅力です。それは、「温泉」であり、「スキー」でした。軽便鉄道は、始めは硫黄を乗せた貨車が主で、あくまでも付帯的に付近の中ノ沢温泉や沼尻温泉への湯治客を運んでいましたが、大正9年(1920)に、旅館の人たちにとって長年の夢だった「中ノ沢への通年の引き湯」が実現し、さらに早稲田大学スキー部が沼尻温泉で合宿したところから、徐々に観光客が増え、東北最古のスキー場「沼尻スキー場」が開発されるに当たって、今度は

内外から多くの人が参加しました。「鉄道や硫黄にかかわった人は、廃止になってからは全国各地に行ってしまったんだけど、そういう人たちがたくさん集まってくれましたね。一体どうやってイベントを知ったんですかね」と田中さんは首をかしげながらもうれしそう。鉄道は30年余りの歳月を超えて、人と人の心をつなぎ、結んでくれたようです。また車で線路跡を案内してくれた「最後の機関士」渡部さんは、「下館から白木城までの3*ちよっとは、線路が真っすぐで、磐梯山は見えるし、運転していて気持ちのいい場所だったね」と話します。猪苗代町「緑の村」に保存されている当時の機関車に乗り込むポーズを決めた渡部さんの表情は、いつまでも「あのころ」のようでした。

イベントのほかに写真集を発行するなど、安部さんの活動は精力的。田中さんも渡部さんもその主要な制作メンバーとなりました。写真集はすでに続刊の発行へと話が進み、さらに、昨年は中ノ沢が中心となって開催されたイベントも、今年は、始発の川桁青年部からも参加の申し出があり、軽便への情熱は広がるばかり。沼尻軽便鉄道は今も、未来への思いを乗せて、人々の心の中を走り続けているのかもしれない。

「観光客が主」へと変化していきました。冬の間は、沼尻駅からスキー場までの約2*が、スキー客の行列でつながったと言いますから驚きです。そして何よりも、通勤・通学の足となったり、行商のおばさんが乗り込み、村々を回って四季折々の品を売り歩いたり、日々の暮らしや季節を運んでくれたことが、沿線の人々の大切な思い出となっています。

惜しまれつつ昭和43年(1968)に廃止となり、今ではもう、当時の線路も駅舎もほとんど消えてしまいましたが、現在の沼尻にある財産 温泉もスキーも生活道路も、すべては鉄道が導き、築いてくれたもの。人の喜びも悲しみも、出会いも別れも乗せて走り続けた軽便鉄道は今も、地域に生きる人々の心に刻まれ、受け継がれています。



沼尻駅にて(昭和13年) 軽便鉄道・最後の機関士となった渡部力さんも、当時は21歳でした(写真中央)

廃止から30数年を経た昨年10月に、懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて20000歩というイベントが開催されました。その開催にあたって力を尽くされた安部なさん(中ノ沢温泉旅館組合)、田中新一さん(元日本硫黄(株)沼尻鉱業所)、渡部力さん(沼尻軽便鉄道・最後の機関士)にお話を伺いました。

「沼尻を訪れる人に昔と同じ線路跡を歩いてもらおう」として、沼尻駅のあった中ノ沢で昔と同じ心で迎えよう。そんな安部さんの情熱が、周りの人々を動かしました。「いやあ、おかげですいぶん働かせられましたよ」と、田中さんも渡部さんも楽しそうに笑います。安部さんは、小さいころから軽便鉄道に親しんでいた一人。軽便への「ありがとう」の思いを込めて企画したイベントには、県



昨年10月に行われた、懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて20000歩。沼尻駅近くの線路跡は緑のトンネルとなっており、参加者は思い思いに、風のおいとしさを感じながら歩いています。今年8月26日(土)に開催。お問い合わせはウオーキング実行委員会まで
0242(64)3449